

【研究メモ】

チャム人の失われた呪術書をめぐって〈後編〉

—カンボジアのマイノリティ・ムスリムの現在—

大川 玲子

目次

<前編：前48号掲載済>

はじめに

- (1) チャム人とは
- (2) なぜチャム人呪術師を研究するのか
- (3) 本研究の射程と方法

前編注

前編の主要参考文献・資料

<後編：今号掲載>

1章 チャム人呪術師の現状：現地調査より

- (1) クルーとなった経緯
- (2) 呪術の手法：3つ文化の混交
- (3) クルーという職業への視線と自己認識

2章 『占星術の書（キターブ・イルム・アル＝ファラク）』をめぐって

- (1) 2人の呪術師
- (2) 曖昧な『書』のイメージ：形態、内容、そして失われた理由

おわりに

後編注

主要参考文献・資料

1章 チャム人呪術師の現状：現地調査より

(1) クルーとなった経緯

本調査の質問事項のなかの主要なもの1つに、どのような経緯でクルーになったのかという問いがある。これへの答えは大きく分けて2つあり、先達のクルーから教えられた場合と夢などの神秘体験によって学んだと主張する場合であった。前者の場合は、親（父の場合が大半）や祖父といっ

た親族から学んだとする者が多く、その知識や技術は豊富で系統だっているように見受けられた。また特定の師にはつかなかったが、周囲の複数のクルーから教えを受けたとする者も少なくなかった。MSOは次のように話してくれた（87m/20131127）。

先生と言える人は1人ではない。友人から教えてもらって、それを暗記した。また評判の良いクルーがいると聞けば、そこに行って教えてもらった。教えてもらった内容は、例えば病気の時はこういう話を

して、こういう治療法（水や紙）を行えばよい、ということである。これらの教えてもらったことを合わせて、自分の方法を確立した。

これに対して後者に属する者たちは、夢に現れた人物や自分に憑依した霊から呪術を教わったことを契機にクルーとなったと説明している。これは特に女性クルーに多く、自分自身の霊的体験からこの仕事を始めたというケースで、現実世界の師につく機会はなかった者たちである。例えば葉などを使って呪術を行う SR (70f/20131027) はこう言っていた。クメール・ルージュ期が終わった数年の後、夢にアラブ人風の老人が現れ、呪文を教えてくれるようになり、自分はそれを用いてクルーの仕事をするようになった。その夢は今も続いていて、何か自分に良くないことが起こりそうな時、事前に知らせてくれる、と。

LM (55f/20131029) は憑霊タイプのクルーである。クルーとなった経緯について次のように述べてくれた。

30 ほど前に大病を患った後、夢のなかで自分の魂が体から出ていき、1 人の男性に会った。男は湖の近くで自分に話しかけ、湖に入るように言った。自分は何度も拒んだが、繰り返しそこに入るように言われたので、入った。すると湖のなかには美しい小さな家があり、そこには神がいた。神は杖を持ち白い服を来た老人だった。神は自分に呪術についての知識を与えた。

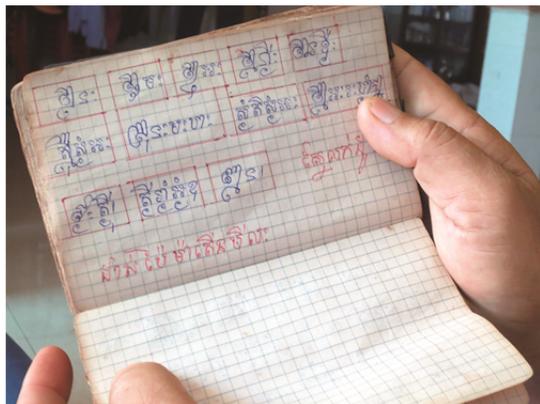


写真 4 クメール語の呪文を書き留めた呪術師 KY のノート。依頼者の病状に応じて、呪文を選び、書き写して護符として渡すという。(撮影筆者)

その頃 LM は漁業を生業としていたが、夢を見た後、それをやめてクルーとなった。家族に憑霊時の様子について尋ねると、彼女は白い衣を着て香水を付けると意識がなくなり、依頼者が求める霊が下りてきて、彼女の口を通して語り始める、ということであった。シアヌーク前国王の夭折した王女カンタ・ポパ (1962 年没) の霊が降りることもあったという。

類似のケースは男性クルーのなかでも数は少ないが見られた。KY (53m/20131218) は主に病気を治療するクルーであるが、その術を夢のなかでクメール人 (仏教徒のカンボジア人) の呪術師から学び、クメール語やサンスクリット語の護符も用いると述べた (写真 4)。彼の家にはメッカのカアバ神殿のポスターがあり、家族の女性たちはヒジャーブ (スカーフ) をしており、間違いなくムスリムとして生活しているチャム人の家庭であるが、行っている呪術はクメール系のものである。これは推測にしかすぎないが、もし実際にチャム人がクメール人呪術師から学んで呪術師となり、そのことを口にしづらい場合には、夢で見たと主張することもあるかもしれない。いずれにせよ、このように夢や憑霊を通して呪術を学んだと主張するケースは、家族や周囲に適切な師がいない場合に多いと言えるだろう。

(2) 呪術の手法：3 つ文化の混交

クルーたちが実際にとり行う呪術の手法は多様で、チャムパ、イスラーム、クメールの 3 つの文化を起源にしていると分類することができる。この分類は実際にそうであるかという真偽よりもむしろ、クルーがそのように認識している点に重点を置いたものである。これは、それぞれのクルーが自分の呪術を何に依拠しているのとらえているのか、さらには各々のアイデンティティの在り処を示す重要な指標であると考えられる。

まずチャムパ王国に由来するとされる呪術としては、HA (72m/20130808) の行ったものが特徴的であった。彼は卵とろうそくを夜 9 時に持参すれば、これらを用いて悩みの解決方法を占うことができると言い、これはチャムパ王国由来の呪術だ

と明言していた(写真5)。またMD(50m/20131029, 20131220)はチャムパ王国からカンボジアに逃げて来た時にチャム人が乗っていた船の絵を、護符として用いることがあると述べている(写真6)。

とは言え最も多く見られたのが、イスラームに依拠すると主張される呪術の手法であった。ほとんどのクルーが呪術をとり行う際にクルアーンの「アーヤ」(アラビア語で「句」)を唱えると述べ、クルアーンの句をアルミ板に書きこんだものをお守りとして作っていた。またマレーシアで出版されたクルアーン解釈書(TS/73m/20131029)や祈祷書(HA/77m/20131030)、さらには呪術書とそこから描き写された護符などが用いられていた(SS/41m/20131204)。

もう1つが、カンボジアのクメール文化に根差した呪術である。特に薬草などを用いるクメール医術と呼ばれる伝統医療を利用するが多い。例えば前述したようにKY(53m/20131218)は夢のなかでカンボジア人から呪術を学ぶと語るが、その家の裏庭の小屋にはたくさんの患者が待っていた。彼によれば、クルアーンは使わず、クメール語やサンスクリット語の文言が書かれた護符、さらには薬草の粉や自分の唾液などを用いて病を治療するという。彼の家族はムスリムとして巡礼やヒジャブなどを実践しているわけだが、その呪術にはイスラーム性は全く見られない。

ただしチャムパ、イスラーム、クメールの3要素は、完全に独立したものではなく、他の要素との混淆が見られる。例えばTS(73m/20131029)はモスクのイマーム(導師)⁽³²⁾を務めるが、クルーとしては引退している。メッカ巡礼の経験者で、家も裕福である。かつては家畜を治療する助手として働き、その後、呪術師として病気治療を中心に活動していた。その呪術について尋ねると、クルアーンに基づく知識だと考えているが、クメール医術を学ぶプログラムに2年間参加した経験があり、自分の呪術は「科学に基づいた上で、イスラームとクメールを混合したようなもの」と述べている。

クルーのSN(36f/20131128)もまた、「イスラーム人」の男性霊が自分の体に入り、呪術を学んだ



写真5 クルーHAに指示され、卵と赤いろうそくを持参した。HAは卵を水の入ったお椀に入れたが、その下にはカッカ文字(チャムパ文字)が書かれた紙が敷かれている。(撮影筆者)



写真6 MDの祖父が描いたとされる、チャム人がチャムパ王国からカンボジアに逃れてくる際に乗った船の絵。呪術の護符に用いられることもあるという。(撮影筆者)

と主張する。彼女もクルアーンやアラビア語は用いず、トランプや人相・手相から未来を占うとし、自分の呪術は「イスラームとクメールの混合」だと述べた。MM(71m/20131203)も自分の呪術は、チャムパに由来する呪術(後述するが「イルム・アル=ファラク」)、クメール医術、クルアーンと

いうイスラームの融合だと述べていた。

先に述べたように、クルーたちが依拠する呪術の文化的背景はそれぞれが依拠するアイデンティティの現れだと考えられる。クルーたちを概観すると、純粋にチャムパ的呪術を用いる場合は極めて少なく、彼らの大半はイスラームに依拠し、場合によってはクメール的伝統を利用している。この状況は、現在のカンボジア社会に生きるチャム人の庶民的なアイデンティティ認識に通じると考えられるが、この点は後に論じたい。

(3) クルーという職業への視線と自己認識

チャム人呪術師への内外からの視点は単純なものではない。カンボジア・クメール社会にはチャム人の呪術を畏怖しつつ依存するという様相が見られる。またチャム人共同体内でも「チャムの30%の人がクルーを信じているが、70%は信じていない」(SN/36f/20131128)とのクルー自身の言葉があるように、呪術師が全面的に認められているわけではない。特にカンボジアの外の「スンナ派」イスラームを知る教養層からは強い批判の言葉を聞くことが多い。クルーも実際に、「イマームやハケムといった偉い人たちは呪術を信じていない」(MT/60m/20131129)と述べている。

実際に、元国会議員のアフマド・ヤフヤー(1945年生/m/20140203)は激しくクルーたちを批判している。彼はチャム共同体のリーダーの1人で、クルアーンのチャム語・クメール語への翻訳書刊行やチャム人の学生への奨学金支援などを行っている。これらの活動への援助は中東諸国からの支援金であり、彼はこれらの国の人々とのつきあいがあり、「正統スンナ派」的イスラームをよく知っている⁽³³⁾。

筆者がクルーに関する質問を始めた時、まずアフマド・ヤフヤーは「チャムのなかにクルーがいるのか」と驚いた表情を示した。その後、筆者と問答をしたところ、彼は若い頃はチャム人のクルーの家に世話になっていたことがあり、その実態についてはよく知っているが、今もまだクルーがいるとは思ってもよらず、驚いた表情を示したということが分かった。この反応にはいろいろな解

釈が可能であろうが、少なくとも彼は現在、チャムのクルーの存在とは無縁であることを筆者に示したいと考えたことは確かである。

さらにクルーについてどう思うかと尋ねると、以下のような内容の返答であった。

私はそういった人たちを信じない。1つに、そのようなクルーになるのはイスラームの教えに反しているから。2つに、彼らは人々に嘘をついているからだ。悪魔にとり憑かれて、悪いことをさせられているのだ。人はどうやって生きるのか選ぶ権利があるが、クルーたちは容易い方法で生活の糧を得ようとしている。だからそういった人たちは、イスラームの教えに照らして考えると、死んだ後に天国には行けないだろう。

ハック・ラヴィ(46m/20130702)もまたクルーを強く批判している。彼はダクワ・タブリーグに属すと考えられる人物である。その外見も、普段から帽子と長衣を身に着けて濃い髭をたくわえるというカンボジア内では異彩を放つ独特のもので、南アジアや中東のムスリムを彷彿とさせる。出身地を尋ねると、ダクワ・タブリーグの拠点のあるプム・トゥリア(旧コンボン・チャム州/現トボン・クム州)であり、職業を尋ねたところ、人々にイスラームを教える先生のようなもの、という返事が得られた。しばしばプノンペンの上アド・ビン・アビー・ワッカーズ・モスクの中庭にたたずんでおり、他のチャム人によれば、イスラームに詳しい人だから彼に聞くとよい、とのことであった。

ハック・ラヴィにクルーについて尋ねたところ、次のような回答であった。

イスラームの考えでは、クルー是最悪の存在だ。はっきりと分からないこと、例えばなくなった物の場所などを適当に言っているだけ。本当のことはアッラーのみが知っている。彼らのイスラーム理解は間違いで、ジャハンナム⁽³⁴⁾(地獄)に行くだろう。

ヌール・アル=イフサーン・モスクのイマーム兼ハケムのレ・ラザリ(43m/20131128)も同様にクルーを否定している。彼は9年間サウディ・アラビアのメディナに留学しており、流暢なアラビア語を話す。筆者が「この辺りにクルーはいない

か」と尋ねたところ、次のような回答であった。

この辺りにクルーがいるかどうかは分からない。そもそもイスラームにはクルーはいない。未来のことは人間には分からないので、クルーの仕事はイスラームに反している。

これらに対して、クルーたちの大半は呪術を正当化しようとしていた。その根底には、呪術を「良い呪術」と「悪い呪術(邪術)」に二分する発想が見られる。これに基づき彼ら自身は前者を用いているのだからイスラームに反しない、と主張されることが多い。DM (62m/20131218) によれば、クルーのなかにはクルアーンからのつまり「アッラーからの知識(イルム・ポー)」に基づく者と、「アッラー以外からの知識(イルム・トゥナウ)」に基づく者がいるという。「ポー」も「トゥナウ」もチャム語で、「ポー」は神への敬称である。「トゥナウ」はDMによればクルアーン以外からの知識のことで、具体的にはジンやシャイターンの他⁽³⁵⁾、死者や木の霊など非イスラーム的存在から教えられたものだという。また死者や木の霊は、クメール的またはチャム的な概念で、反イスラームとしてとらえられている。DMに、前述したインタビューを断った裕福なクルーについての尋ねたところ、「クルアーンに基づかないことをしているので、それを隠そうとしたのだろう」とも述べており、非イスラーム的クルーを批判的に見ていることが分かる。

MM (71m/20131218) も同様に呪術を二分し、クルアーンと医療を用いることはイスラーム的、クルアーンを用いない場合は「シルク(多神崇拜)」だとする。前者について言えば、チャム人呪術師はキンマの葉⁽³⁶⁾を病の治療に使うことを好む。MMによればジンやシャイターンが依頼者の体内にいる場合、この葉の匂いや味を嫌がるので、これを用いてそれらを弱体化させた後、クルアーンのアヤを唱えて追い出すという。後者で用いられている「シルク」という言葉であるが、これはアラビア語で「多神崇拜」を意味し、当然ながら一神教であるイスラームでは究極的な神への冒瀆である。これについてMMは、アッラーを忘れて他のクメールの神々やジン、シャイターン、木な

どの霊に祈ること、また霊媒することであると説明している。つまり、アッラー以外を信じることで成り立っている呪術は「シルク」だと考えているのである。このようにクルーはアッラーの言葉そのものであるクルアーンに基づくかどうかでその存在を二分し、当然ながら自らは前者に属すと考えている。

この基準に加え、呪術が人を助けるものか、傷つけるものか、という点でもクルーは二分されるという(MR/31f/20131226; SS/41m/20131220 ほか)。この2つの区分は、表現は異なるがほぼ同じもので、クルアーンに基づき人助けをするクルーとクルアーンに基づかず人を害する者に二分しているようである。RM (60m/20131027) にその呪術の起源は何かと尋ねた際、彼はイスラームであると答えた後、「これはクルアーンから学んだもので、イスラームに反しない。クルアーンのなかには人を助けるための句がある」と述べている。その他、次のようなコメントも得られた。

クルーには2種類いる。クルアーンの知識に基づく者と基づかない者。だが外部からはそれぞれがどちらのタイプなのか分からないため、批判されているのだと思う。また自分は人を傷つけるようなことはしない。以前、浮気している夫と離婚させて欲しいと依頼されたが、これはできないと断った。仲直りさせることならできる。(SKD/40m/20131226)

人の問題を解決し、クルアーンと[クメール]医療のみ使っているので問題ないと考えている。(MK/67f/20131227)

このようにチャム人呪術師たちは、クルアーンに基づき人助けをする「良いクルー」と、クルアーン以外の知識に基づき人を害する「悪いクルー」の2種類にクルーを分け、自らを前者と主張することで自己正当化をはかっている。これは少なからぬクルーが、クルーであるためには能力だけではなく、良い人格、誠実な人柄が必要であると述べたことと関係していると考えられる。クルーたちはその仕事が批判にさらされがちだと認識し、人を助けるために知識を使っていると強調することで、批判をかわそうとしているとも考えられる⁽³⁷⁾。

2章 『占星術の書(キターブ・イルム・アル＝ファラク)』をめぐって

(1) 2人の呪術師

筆者はこれまでチャム人の呪術書としての『キターブ・イルム・アル＝ファラク』について、何らかの文献で言及されたものを目にしたことはない。この『書』を知ったのは聞き取り調査のなかで、偶然に言及したクルーがいたことが契機であった。だが『キターブ・イルム・アル＝ファラク』という言葉そのものは明らかにアラビア語である。「キターブ」は「書物」、「イルム・アル＝ファラク」は「占星術」の意味で、『キターブ・イルム・アル＝ファラク』は『占星術の書』となる。

この書について筆者に初めて語ってくれたのは、イスラームではなくチャム由来の呪術を用いると明言するHA(72m)であった。この後、他のクルーたちにもこの『書』について尋ねたが、知識を持つ者は少なく、そのなかでも曖昧なイメージだけを持つ者が多かった。最も詳細で確信を持った説明をしてくれたのは結局HAであった。また、MD(50m)はその祖父も有名なクルーで、チャムパの知識を十分に持っていたらしく、そこからの伝聞ではあるが『書』について語ってくれた。本章ではこの2人のクルーたちの語りから、『キターブ・イルム・アル＝ファラク』について叙述していきたい。(以下のHAへのインタビューは、2013年5月31日と8月8日、12月4日、12月25日に、MDへのものは2013年10月29日と12月20日に行われた。)

HAはコンボン・チュナン州に生まれ、2013年当時72才、4年前にメッカへの巡礼(ハッジ)を終え、礼拝も欠かさない敬虔なスンナ派ムスリムである。コンボン・チュナン州は母の出身地であり、父はベトナムに近い地域の出身であった。クルーになったのは、師匠につき、さらに高名なクルーであった祖父の残したカッカ語(チャムパ語)の書物を学ぶことによってであった。普段は病氣治療や夫婦問題、子どものトラブルなどの相談を受けており、相談者の大半は女性で、クメール人が多いという。未来については占わないのかと尋

ねたところ、普段は行わず、未婚の人に対してのみ、夜9時に卵を割ってグラスに入れて行うとのことであった(写真5)。呪術としてはクルアーンを用いず、ジンやシャイターンに命じて術をかけるとのことで、これはHA自身も述べているように、イスラームよりむしろチャムパの伝統に則る呪術だという。

HAに、クルーのなかで未来についての占いをする人が少ない理由を尋ねた際、ただ推測しているに過ぎないので需要が減ってきているという点に加えて、「イルム・アル＝ファラク」の知識を持っている人が減っているため、という返答が得られた。彼によれば、若い世代は外のイスラームの影響を受けているので、この知識はイスラームに反すると考えて学ぼうとしないという。ここでも従来からチャム共同体にあったチャム系呪術が、外部から入ってきたイスラームの教えによって存在感を失いつつあることがうかがえる。さらに「イルム・アル＝ファラク」とは何かと尋ねると、未来を推測するための学問とのことであった。この言葉がアラビア語で「占星術」を意味することから、「月や星の動きを見るのか」と筆者が尋ねると、その通りで、さらに体のホクロなどからも判断するとの返答であった。ただ、「これはイスラームに反していて、ジンやシャイターンに属す。自分自身は知ってはいるが、使わない」という説明が加えられた。

しかし前述したように、彼はジンやシャイターンを使うと述べており、対外的には「イルム・アル＝ファラク」を使わないと述べていても、実際にはある程度用いているのではないかと推測することもできる。それはこれから述べる『書』についてのHAの言説からも推測される。彼はかつて『書』を持っていたが、「イスラームに反する内容のため1982-3年頃に捨てた」という。しかし同時に「もし持っていたても、人には見せないだろう」と笑いながら述べていた。このHAは筆者がインタビューしたなかでは最も深い呪術の知識を持っているように見受けられた。それは高齢ということもあるだろうが、チャム系呪術を用いていることによるのではないかと考えられる。同世代や

さらに高齢のクルーでもチャムパ系ではなくマレー系イスラームの呪術を学んでいる者もおり（例えばHA(77m/20131030), AT(81m/20131226)), 高齢者がチャムパ系呪術を用いるとは限らないことが分かる。HAは、自分の呪術はクルアーンを用いず、イスラームに由来せず、チャムパ伝来のものだと明言している。さらに彼の祖父もカンボジア王家と関わりがあったほど高名なクルーで、カッカ語を読み書きでき、チャムパの呪術について造詣が深かったという。HAはそのチャムパ呪術を継承しているという認識を強く持っているクルーであった。彼の語る『書』とその内容に関しては、最も信憑性が高いのではないかと考えられた。

次にもう1人のクルーMDであるが、彼は生まれも育ちもプノンペン川の沿いの集落で、インタビュー時50歳であった。かつて彼の家は裕福で大きな家に住んでいたが、人にだまされて財産を失い、借金もできたため、今のような状態になってしまったという(写真7)。彼もHA同様に、有名なクルーであった祖父の教えを受けてクルーになったのであった。この祖父もカッカ語を話し、アラビア語も理解できたが、クメール語はできなかったという。MDへの相談者もクメール人女性が多く、内容も夫婦間の問題や病気、商売などだという。ただ彼は、未来も占うことができるが、反イスラームであるためしない、と述べていた。



写真7 川沿いにあるMDの家。近所にある別のクルーたちの家と比べると貧しいことがうかがえる。(撮影筆者)

さらにクルーという職業も生活のためにしているという意識があり、この仕事についてイスラーム的に全く問題がないと思っているわけではない、という。このようにMDはHAと類似した家庭環境に育ったクルーではあるが、チャムパ的呪術を行っているわけではなく、イスラーム的価値観を気にしている様子がうかがえた。

MDに『キターブ・イルム・アル=ファラク』について尋ねてみたところ、カッカ語で書かれたものだと聞いたことはあるが見たことはない、祖父は持っていたようだが、『書』はクメール・ルージュ期に土に埋められてその後、見つからなかった、との答えであった。そしていくつもの絵や文字が書かれた大きな布を見せてくれ、これがその『書』に由来するものだと思うと説明した。例えば船の絵(写真6)は、チャム人がベトナム人に追われてチャムパ王国からメコン川をさかのぼり、カンボジアにやって来た時の船で、チャムパ王宮の木で作られており、乗っている人たちを敵から守る力を持つ。これらの絵や文字も呪力を持ち、紙に描き写して護符にするという。この布は誰がいつ、何の目的で描いたのかと尋ねてみた。すると彼は、これはクメール・ルージュ期の前に祖父が『書』から描き写したもので、祖父は偉大なクルーで未来を予知できたため、その後、どのようなことが起こるか分かっており、『書』が失われる前に布に描き写し、内容が完全に失われないようにしたのだ、と説明してくれた。

実はこの後、HAにMDの布の写真を見せ、『書』にこのような絵があったかと尋ねたところ、HAは『書』は文字のみであったと述べた(20131225)。MDは『書』を実際には見たことがないと明言しており、この布が偉大なクルーである祖父が大切に保存していたものであることから、勘違いをしているという可能性も否定できない。ただ、MM(71m/20131218)によれば、MDの住む地域の川沿いの家に、かつてこの『書』を持っているクルーがいると聞いたことがあるとのことで、それがMDの祖父であるかもしれない。またDM(62m/20131203)に布の絵を見せた際、『書』にはこのような絵があったと思うとも述べている。このよう

にクルーによって『書』のイメージは多様であり、失われた呪術書の真の姿を描き出すことは簡単ではないことが分かる。

(2) 曖昧な『書』のイメージ：形態、内容、そして失われた理由

『書』のイメージは多様で曖昧であるが、それは書名にも言え、『キターブ・イルム・アル＝ファラク』というアラビア語ではなく、『キターブ・トムロク』や『キターブ・チュルブロク』という名で呼ばれる場合がある。またこれらが同じ本の名前ではなく、2冊の別の本だったと述べるクルーもいる。「トムロク」や「チュルブロク」の意味について何人ものクルーに尋ねたが、知る者はいなかった。「イルム・アル＝ファラク」というアラビア語は口頭では「イルムルファラク」という発音になり、それが転じて「トムロク」や「チュルブロク」になった可能性もあり、筆者は別の書ではなく同じ書ではないかと推測している。HAも、人によって呼び方が違うだけで同じ本だと述べ(20131225)、MDも2つあるのかどうかは分からないとの返答であった(20131220)。

2冊が別の本だと考えているクルーたちは、次のように違いを説明している。HAやMDと同様にクルーであった祖父から呪術を教えられたというMM(71m/20131218)はこう語った。

『キターブ・トムロク』は多様な呪術についての書物で、カッカ語で書かれ、チャムパ王国のある村から来たものである。「トムロク」の意味は分からない。

『キターブ・アル＝ファラク』^[ママ]は『キターブ・トムロク』とほぼ同じものだがカッカ語のものとそのジャウィ語(筆者注：アラビア文字で書かれた古いマレー語⁽³⁸⁾)訳があり、結婚時期など未来を知るための呪術について詳しく書かれている。

また祖父母がクルーで、この書の一部を持っていたというRM(60m/20131225)によれば、2冊の本の内容はとても似ていて、アラビア文字で書かれていた。『キターブ・トムロク』は結婚相手などの未来について知る呪術が書かれ、『キターブ・イルム・アル＝ファラク』は未来だけでなく、今の生活のことを知る呪術についても書かれている

という。

夢をきっかけにクルーとなったSTは次のようなことを語ってくれた(45m/20131226)。

『キターブ・イルム・アル＝ファラク』を他のクルーが使っていたのを見たことがあるが、その人はもう亡くなっている。それは「シルク(多神崇拝)」なので自分は使わない。『キターブ・トムロク』は「オルセーの人たち」のところで見たことがある。

ここの「オルセーの人たち」とは前述したようにイマーム・サンの人々のことで、マジョリティの「チャム人」から、チャムパ性を残した反イスラーム的な呪術を使う人たちと認識されている。このように2冊の内容的な違いは明白ではなく、原本と翻訳書があったとすれば、それと混同されているのかもしれない。

次に、書物の形態についてもイメージは曖昧で共通点が見られない。HAによれば、カッカ語だが、アラビア語に訳されていて、A4サイズくらいの大きさの20ページくらいの薄い本であったという(HA/20131225)。AA(63m/20131224)は、『書』について聞いたことはあるが自分は知らない、ただ近所に住む別のクルーが持っているのを見たことがあり、1冊の本というよりも、紙の束のようなものだったと述べている。他方、AAと同じ集落のMS(63m/20131224)によれば、その妻の亡き父もクルーで、この『書』を持っていて、とても分厚い本であったという。

ただし内容に関してのイメージは共通する部分が多い。これまで何度も言及したチャムパの呪術を行うHAは、この本を学べば死期や未来の出来事が分かって、それを避けるようになり、アッラーが全てを定めたとするイスラームに反すると述べる(20131225)。DM(62m/20131203)は、「イルム・アル＝ファラク」は未来を占うものだが、未来はアッラーのみが知るものであり、シルクだという。彼自身はマレーシアから来たアラビア語の本を用い、クルアーンの章句を使って呪術を行っており、「イルム・アル＝ファラク」には批判的である。このように、未来について知るための呪術の書であり、反イスラームであるという見解が他のクルーからもよく聞かれた。「以前はよく知られ

ていて、他の人が使っていたのを見たことがある。未来を知ることができるが、自分は使わない」(MK/67f/20131227)。

また「危険な書物」(SKD/40m/20131226)とも描写され、この認識は、父から呪術を学んだ SS (41m/20131220) 自身の叔父に関する次のような話からもうかがえる。

『キターブ・トムロク』も『キターブ・イルム・アル＝ファラク』も聞いたことがあるが内容は知らない。父からも教わっていない。未来を知ったり、体中のホクロを知ったりするための良くない知識なので、イスラームに反する。クルーだった叔父がかつてベトナムにいてこの本を持っていたところ、政府によって投獄された。マレーシア政府やベトナム政府はこの本を禁じている。未来を知ることになる危険なものだからである。そしてこの本を処分した。叔父は25年ほど投獄され、今は釈放されている。このような経緯があるため、昔の世代の人たちは下の世代にこの本の知識のことを伝えようとしなかった⁽³⁹⁾。

このように『キターブ・イルム・アル＝ファラク』は、未来を知るという反イスラーム的な内容を持つ危険な書物であり、真偽は別として、これを持つことそのものが政治的な問題になると考えられるほどである。

それでもはやこの『書』は現存していないわけであるが、消失の理由も上述した「危険な書」という認識に通じるものである。クルーたちのなかには、この『書』が現存しない理由としてクメール・ルージュ期に紛失したとする者たちと自ら処分したとする者たちに二分される。

クメール・ルージュは知識を敵対視し、知識人の虐殺や焚書を行ったため、この時代には確かに多くの文献が失われている⁽⁴⁰⁾。イスラーム文献に対してもクメール・ルージュは容赦のない過酷な対応をとり、大量に破棄されたと考えられる。そしてこれを守るために土に埋めるチャム人も少なくなかった (Ysa 2006: 81; Okawa 2013a, 2013b, 2014)。よってクルーたちのなかには、この『書』もまたクメール・ルージュ期に失われたと考えている者たちがいる。例えば前述したように MD は、

その祖父が持っていたがこの時期に失われたと述べたが (71m/20131218)、奇妙なことに次のような MM (71m/20131218) の話は MD の内容に合致している。

『キターブ・トムロク』の大半はこの時代に失われたが、一部が紙や布に書かれて残され、かつてチュロイ・チュンワー (筆者注: MD の住む地区) にこの本を持っているクルーがいたらしいが、詳しいことは分からないし、今はどうなっているのかも知らない。『キターブ・イルム・アル＝ファラク』は、クッカ語のものはクメール・ルージュ期に失われたが、これをジャウィ語に訳したものがあるらしい。

MM は実際に持っていたわけではないため、これが真実であるかはここでは問題ではない。また、MM の話のなかに登場するチュロイ・チュンワーのクルーが MD の祖父かどうか分からない。ただこの呪術書がクメール・ルージュ期に失われたと彼が考えていることは確かである。

他方、この『書』が反イスラームであることから、チャム人共同体が自覚的に破棄したという考えを口にするクルーたちもいた。つまりクメール・ルージュ期を乗り越えて残されたが、その後でチャム人の意図によってこの世から葬り去られたというのである。

HA (72m) が自ら『書』を破棄したと述べたということは前述した通りである。さらに MS (63m/20131224) も自分で燃やしたと主張し、次のようなことを語ってくれた。

『キターブ・トムロク』と『キターブ・イルム・アル＝ファラク』は未来について述べる反イスラーム的内容で、自分はこの2つが混ざったものを持っていたが燃やした。これはチャムバから来たもので、オルセーのイマーム・サンからもらった。

このように MS は『書』は2冊あったが1冊にまとめられたものを持っていたと述べており、『書』の実態がどのようなものだったのかに関してさらに曖昧さを加える語りになっている。ただここで重要なことは、彼もこの『書』がチャムバに起源を持ち、オルセーのイマーム・サン共同体に由来する反イスラーム的な内容であることが破棄の理由だと明言していることである。

さらに AT (81m/20131226) はチャム人の教養層がこれを嫌って破棄させたと述べている。

その書について聞いたことはある。シャイターンを使う術についての本で、特にチャム人の宗教知識人たちが恐れて捨てた。

この宗教知識人は、カンボジア外のスンナ派イスラームの影響を受け、呪術を反イスラームと考えていたと推測される。以上からチャム人共同体が「自浄努力」としてこの『書』を葬ったとする考えが、クルーのなかにあることが確認される。

おわりに

カンボジアのチャム人ムスリム共同体は、チャムパ王国に由来するとされる呪術書『キターブ・イルム・アル＝ファラク』を失い、記憶のなかのみ保持している。若い世代は呪術師であっても、もちろんそうでなくても、この『書』のことを知らない。失われた理由は、他の多くの文献と同様にクメール・ルージュ期に失われたということもあるだろう。だがクルーたちの語りから、この悲劇的な時代の後にも残っていたものがあったが、チャム人の意図によって破棄されたことが明らかになった。そしてこの意図とは、『書』が未来を占うための反イスラーム的な内容であったため、共同体上層部の宗教指導者やクルーたち自身が破棄を決めたというものであった。

本稿でチャム人クルーの呪術には、チャムパ系、イスラーム系、そしてクメール系の3種が見られ、それぞれが彼らのアイデンティティを象徴していると考えられると指摘した。この3要素はクルーのみならず、カンボジアに居住するマイノリティ・ムスリムであるチャム人全体に通じる。American Institutes for Research によるチャム人の自己認識調査の結果はすでにふれたように、「クメール・イスラーム」が83%、「チャム」が16.5%、そして「クメール」が0.5%であった。だがさらにこのレポートは、チャム人はアイデンティティとしてチャム性を強調しすぎると危険と考え、カンボジア社会のなかで出すぎず調和を求めると論じている (American Institutes for Research

2008: 26-27)。ここからもチャム人のアイデンティティはチャム人、ムスリム、クメール人の3つに分かれるが、総じてチャム人であることは強調せずに「カンボジアに住むムスリム」つまり「クメール・イスラーム」として身を処すことをよしとしていることがうかがえる。チャム人がチャムパ王国復興を企んでいるという噂によって、マジョリティのクメール人との関係が悪化したことがあったと述べるチャム人もいる (American Institutes for Research 2008: 35)。

しかし過去にはチャム人としての民族意識が高まった時期もあった。クメール・ルージュ期以前の1960年代には、チャムパ王国の復興を求める政治運動と深く関わるチャム人がいた (Jaspan 1970; Hickey 1982; 樋口 1995: 151-159, 276-281)。この時期の民族意識の高まりはベトナム戦争期の特殊な状況をふまえて考えなければならないが、少なくとも当時のチャム人にとってのチャムパ王国の重要性をうかがい知ることはできるだろう。これと比較すると、現在のチャム人のアイデンティティにおけるチャムパ性は明らかに薄まっている。そうすると、本稿で明らかにしたチャム人共同体が自らチャムパ王国起源とされる『書』を消失させたことは、チャムパ性をそのアイデンティティから薄めていくプロセスであったと言えることができるだろう。

では呪術という面から考えてみると、チャムパ王国の末裔であるチャム人であることを表に出さないことにどのような意義があるのだろうか。それはチャムパ王国が、その呪術の強さで知られていたことに関係する。チャムパ王国の伝承には王室に仕える呪術師がしばしば登場し (チャン編 2000)、またベトナムの姫と魔法の木の伝説⁽⁴¹⁾にあるように、この国の滅亡理由もその呪術性が失われてしまったからとする伝承さえある。

さらにチャムパ王国の呪術性の強さは、チャムパ王国の伝統を色濃く残すとされるイマーム・サン共同体が、マジョリティのチャム人からさえ強い呪術を持つとおそれられていることから見てとれる。すでに『キターブ・イルム・アル＝ファラク』が「オルセーの人々」つまりイマーム・サ

ンの人々から来たと考えているクルーの ST (45m/20131226) や MS (63m/20131224) について言及したが、これもその1つの表れである。またマジョリティのチャム人のなかで、イマーム・サンの人々がイスラーム的に「間違っ」呪術を使っていると主張する者も少なからずいた。そもそも「イマーム・サン」とは呪術に長けた聖人の呼び名で、彼を崇拜する者たちの集団が「イマーム・サン」と呼ばれている。筆者がイマーム・サンの長(オクニャー・クヌー)であるカイ・ティアム(74m/20130524)にインタビューしたところ、次のように語ってくれた。この聖人は300年ほど前にチャムパ王国のベトナムによる征服から逃れてカンボジアにやって来て、呪術に長けていたためカンボジア王に認められ、古都ウドンに土地を与えられた、と⁽⁴²⁾。

以上のような状況から、チャムパ性と呪術性の強い結びつきが確認されるわけであるが、そうするとマジョリティのチャム人共同体で『キターブ・イルム・アル＝ファラク』が失われ現存しないという状況をどう考えればよいだろうか。これは、チャム人がチャムパ王国起源の反イスラーム的な呪術を消し去り、ムスリムとしてのアイデンティティに重点を移そうとした結果である。マジョリティのチャム人共同体は、イマーム・サン共同体では今なお見られる呪術と混在していた土着的イスラームを脱して、呪術を認めない「公的」で「正統」なスンナ派イスラームに移行することを自ら選択したのである。

マイノリティというマージナルな存在はアイデンティティ確保のため中心つまり核が必要であり、必然的に求心力または魅力のある中心に向かっていく。チャム人呪術師の状況を見ると、その依拠する術であるチャムパ系、イスラーム系、クメール系の3種のなかで、時代を経るにつれてチャムパ系が薄れ、イスラーム系とクメール系が残っている。今やチャム人にとってチャムパ王国という歴史上の存在にはアイデンティティの核となるような力はあまりなく、イスラームやカンボジアのクメール人社会にはそれがあるということであろう。

チャム人はクメール・ルージュ期の大迫害の後、共同体の外部との関わりを急激に増やしつつある。1つにはカンボジアのマジョリティであるクメール人社会により近づいている。上の世代ではクメール語を話さないチャム人がいたが、若い世代はクメール人社会と関わらずに生活することはできない。もう1つが、中東や南アジアのイスラーム諸国との接近である。この共同体はマレーシアとは歴史的に関係が深く、今もそれは継続されている。だがそれ以外に、世界のグローバル化にともない、クウェートやサウディ・アラビアといったアラブ・イスラーム諸国からの援助や影響を多く受けるようになり、モスクやイスラーム学校が建設され、留学する者も増えている。

このような状況のなかチャム人は、チャムパ王国の末裔であるという伝統的なアイデンティティよりもむしろカンボジア人ムスリムつまり「クメール・イスラーム」というアイデンティティを意識しがちである。そして呪術師たちも同様に、呪術を認めない「公的」イスラームを考慮するようになり、チャムパ系呪術の象徴である『キターブ』を時代のなかで封印することをよしとした。この『書』の喪失は、このようなチャム人のアイデンティティの変化を背景として生じたと理解することができるのである。

後編注

- (32) 「イマーム」はアラビア語の用語をそのまま用いている。
- (33) 例えば Becker 2011 や Eng 2013: 273-274, 282-283 を参照のこと。
- (34) 「ジャハンナム」もアラビア語の用語をそのまま用いている。
- (35) ジンやシャイターンを使っていると明言するクルーはほとんどいなかったが、自分の呪術はイスラームではなくチャムパ由来だと明言する HA (72m/20130808) は、ジンやシャイターンを使って依頼者にかけられた呪いを解いたと教えてくれた。だがクルーたちはもし使っていてもそうだとは明かさなことがほとんどであろうと考えられる。SR (70f/20131027) は、夢を見て相談者が自分の所にやって来るということが事前に分かると語っていた。だが、その近所に住むクルーRM は、SR は邪術を使っている「こういう人は相

談者が悩みを話す前にその内容をジンやシャイターンが示唆するので分かる」と言っている (RM/60m/20131027)。SR はジン・シャイターンという言葉を使わずに状況を説明しているが、RM は実際には SR がジン・シャイターンを用いていると考えている。

- (36) キンマの葉は檳榔の実と組み合わせられて、東南アジアで広く嚙みタバコとして用いられてきた (Rooney 1993)。カンボジアは、クメール人クルーもこれらを病気の治療で用いている (Bertrand 2005: 320-321)
- (37) とは言え、自分が呪術を行っていることを肯定するクルーのなかにも、実際には後ろめたく感じている者もいる。RM (60m/20131027) には息子がいるが、「今は科学の時代であり、学ぶ必要も継ぐ必要もない」と述べていた。また他のクルーたちからも、実はクルーになりたくなかったが、必要としている人に頼まれているので (AA/63m/20131224)、または生活の糧を稼ぐために仕方なくやっている (MSO/87m/20131127; LM/55f/20131029)、といった消極的な発言も見られた。
- (38) チャム人のジャウイ語使用に関しては、Bajunid 2002a を参照のこと。
- (39) すでに本文でもふれたベトナムのチャム人クルーのインタビューからも、共通する聞き取り結果が得られている。筆者がカンボジアに近いメコン川沿いのチャウドックで S というクルー (47f/20130714) にインタビューを依頼したところ、彼女は警察が呪術師の仕事を禁じていると言い、かなり神経質な様子であった。「イルム・アル=ファラク」について尋ねると、次のような回答が得られ、ベトナムのチャム人呪術師にもこの『書』の伝統の記憶がまだあることが確認された。「それは未来について知るための知識で、父親は知っていたが、自分は父親が亡くなってしまったため、これを教えてもらうことはできなかった。この学問はシルクなので、その後、自分ではあえて学ぼうともしていない」。
- (40) クメール・ルーージュはイスラームに対してのみではなく、仏教に対しても弾圧を行った。ワット (仏教寺院) に納められた古いヤシの葉の写本や仏教文献が大量に燃やされており、20%ほどしか残らなかったという説もある。またチャム人共同体と同様に、焚書から守るために仏教文献が土のなかに埋めて隠されることもあった (Harris 2012: 114-117)。
- (41) チャムパ王がベトナムの姫と結婚したために、チャム人を守る力のある木を切り倒すことになり、これが原因で王国が減びたという伝説がある (Cf. Collins 1996: 26-27)。この話についてカンボジアのチャム人の友人に尋ねると、子どもの頃に祖母から聞いたことがあるとのことであった。またベトナムでは、被征服者の征服者に対する憤りを引き起こすからであろうか、この伝説は政府にとってあまり都合がよいものなのかもしれない。ベトナムのチャム人に聞き取りをした際、ベトナム側の奸計にチャムパ王が騙された

という部分がはぶかれており、筆者が問いただすと、ベトナム政府による歴史の説明に従ったとのことであった。筆者がチャムパ王家の末裔を訪れた際、この伝説について尋ねようとしたところ、ベトナム人 (マジョリティのキン族) の通訳が「それはやめた方がいい」と言い、尋ねることができないということもあった。

- (42) イマーム・サンに属す著述家のウソス (?m/20130524) も同じような話を詳細に語ってくれた。それによれば、イマーム・サンが未来を占ったり、人を呪い殺したりできることに王は関心を持ったという。

主要参考文献・資料

- [日本語]
- イブン・バットゥータ (前嶋信次訳) 2004.『三大陸周遊記 抄』中央公論新社。
- 遠藤正之 2002.「十五～十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察 —カンボジアの事例を中心として—」『史苑』63/1: 42-74。
- 大川玲子 1997.「イスティアザの祈禱句に見られるクルアーンの受容に関して」『オリエン特』40/1: 90-105。
- 大塚和夫 2000.『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会。
- 小川博編 1998.『中国人の南方見聞録 瀛涯勝覽』吉川弘文館。
- 北川香子 2009.「ブーム・キエン・ロミエト (カエト・トボン・クモム) のハキーム任命騒動—プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No.20811 の分析と典拠—」『東南アジア歴史と文化』38: 187-208。
- 重枝豊・桃木至朗編 1994.『チャンパ王国の遺跡と文化』財団法人トヨタ財団。
- チャン, ヴェトキーン編 (本多守訳) 2000.『ヴェトナム少数民族の神話—チャム族の口承文芸』明石書店。
- 中村理恵 1999.「ベトナム中南部のチャム族—チャムとバニ」『ベトナムの社会と文化 第一号』(風響社): 179-197。
- 樋口英夫 1995.『風景のない国・チャムパ王国 遺された末裔を追って』平河出版社。
- フォン, チャン・キィ (重枝豊訳) 1997.『チャンパ遺跡海に向かつて立つ』連合出版。
- ポーロ, マルコ (愛宕松男訳) 2000.『完訳 東方見聞録 2』平凡社。
- 松原睦 2012.『香の文化史—日本における沈香需要の歴史』雄山閣。
- 桃木至朗・樋口英夫・重枝豊 1999.『チャムパ—歴史・末裔・建築』めこん。
- 桃木至朗 2010.『歴史世界としての東南アジア』山川出版社。
- 吉本康子 2010.「イスラーム性とエスニック要素をめぐる交渉過程についての一考察—ベトナムにおける「チャム

- 系ムスリム」の事例を中心に一『関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) 次世代国際学術フォーラムシリーズ 第2輯 文化交渉による変容の諸層』: 223-247.
- [英語など]
- American Institutes for Research. 2008. "Assessing Marginalization of Cham Muslim Communities in Cambodia," Report for EQUIP1, USAID (<http://www.citawebdesign.com/Kapes/Site/images/book/pdf/Cham%20Study.pdf>).
- Bajunid, Omar Farouk. 2002a. "The Place of *Jawi* in Contemporary Cambodia," *The Journal of Sophia Asian Studies* 20: 123-148.
- . 2002b. "The Muslim Minority in Contemporary Politics: The Case of Cambodia and Myanmar," 『広島国際研究』 8: 1-13.
- Becker, Stuart Alan. 2011. "Koran Scholar and Translator Teaches Respect and Tolerance," *Phnom Penh Post* (November 4, 2011).
- Bertrand, Didier. 2005. "The Therapeutic Role of Khmer Mediums (kru boramei) in contemporary Cambodia," *Mental Health, Religion and Culture* 8/4: 309-327.
- . 2006. "A Medium Possession Practice and its Relationship with Cambodian Buddhism: The Grū Pāramī," in John Marston and Elizabeth Guthrie eds., *History, Buddhism, and New Religious Movements in Cambodia* (Chiang Mai: Silkwork Books): 150-169.
- Bhengli, Bjorn Atle. 2009. "Muslim Metamorphosis: Islamic Education and Politics in Contemporary Cambodia," in Robert W. Hefner, ed., *Making Modern Muslim: The Politics of Islamic Education in Southeast Asia* (Honolulu: University of Hawai'i Press): 172-204.
- Bruckmayr, Philipp. 2006. "The Cham Muslims of Cambodia: From Forgotten Minority to Focal Point of Islamic Internationalism," *American Journal of Islamic Social Sciences* 23/1: 1-23.
- . 2007. "Cambodia's Phum Trea as Mirror Image of Religious Change," *ISIM Review* 20/Autumn 2007: 48-49.
- Collins, William. 1996. "The Chams of Cambodia," in *Interdisciplinary Research on Ethnic Groups in Cambodia* (Phnom Penh: Center for Advanced Study): 15-108.
- . 2000. "Medical Practitioners and Traditional Healers: A Study of Health Seeking Behavior in Kampong Chhnang, Cambodia (A Qualitative Study in Medical Anthropology Prepared for The Health Economics Task Force, Ministry of Health, The Provincial Health Department, Kampong Chhnang and The WHO Health Sector Reform Project Team Phnom Penh, Kingdom of Cambodia)" (<http://www.cascambodia.org/kgchhnang.htm>).
- De Féo, Agnès. 2007. "Transnational Islamic Movement in Cambodia," Dynamics of Contemporary Islam and Economic Development in Asia, From the Caucasus to China International Conference Organized by the Centre de Sciences Humaines (CSH) and India International Centre (IIC), New Delhi, April 16-17 (<http://www.chamstudies.com/Conf%C3%A9rences/Transnational%20movement%20Cambodia.pdf>).
- Doumato, Eleanor Abdella. 2000. *Getting God's Ear: Women, Islam, and Healing in Saudi Arabia and the Gulf*, New York: Columbia University Press (2nd Revised).
- Eng, Kok-Thay. 2013. "From the Khmer Rouge to Hambali: Cham Identities in a Global Age," PhD Thesis, Rutgers, the State University of New Jersey.
- Farouk, Omar & Hiroyuki Yamamoto, eds. 2008. *Islam at the Margins: The Muslims of Indochina* (CIAS Discussion Paper, no.3), Center for Integrated Area Studies, Kyoto University (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp03.pdf>).
- Harris, Ian. 2012. *Buddhism in a Dark Age: Cambodian Monks under Pol Pot*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hickey, Gerald Cannon. 1982. *Free in the Forest*, New Haven and London: Yale University Press.
- Hubert, Jean-François (trans. by Anna Allant). 2005. *The Art of Champa*, London: Parkstone Press International.
- Jaspan, M. A. 1970. "Recent Developments among the Cham of Indo-china: The Revival of Champa," *Asian Affairs* 1/2: 170-176.
- Kersten, Carool. 2006. "Cambodia's Muslim King: Khmer and Dutch Sources on the Conversion of Reameathipadei I, 1642-1658," *Journal of Southeast Asian Studies*, 37/1: 1-22.
- Kiernan, Ben. 1988. "Orphans of Genocide: the Cham Muslims of Kampuchea under Pol Pot," *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 20: 2-33.
- Lafont, Pierre Bernard. 1994. "Research on Champa and its Evolution," in *Proceeding of the Seminar on Champa at the University of Copenhagen on May 23, 1987* (Rancho Cordova: Southeast Asia Community Resource Center): 1-20.
- Marrison, G.E. "The Chams and their Literature," *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 58/2 (1985): 46-48.
- Maspero, Georges (trans. by Walter E. J. Tips). 2002. *The Champa Kingdom: The History of an Extinct Vietnamese Culture*, Bangkok: White Lotus.
- Okawa, Reiko Kuromiya. 2013a. "Islamic Literature was Buried in the Pol Pot Regime," *Reaksmei Kampuchea*, 2013. 10. 23. (カンボジア語)
- . 2013b. "Hidden Islamic Literature in Cambodia: The Cham in the Pol Pot Period," *Searching for the Truth* (Special English Edition, Third Quarter): 20-22.
- . 2014. "Hidden Islamic Literature in a Cambodian Village: The Cham in the Khmer Rouge Period," *International & Regional Studies* (『国際学研究』) 45: 1-20.
- Osborne, Milton. 2004. "The 'Khmer Islam' Community in

- Cambodia and its Foreign Patrons,” Lowy Institute (http://www.lowyinstitute.org/files/pubfiles/Osborne,_The_Khmer_Islam_community_v4.pdf).
- Ovesen, Jan and Trankell, Ing-Britt. 2010. *Cambodians and their Doctors: A Medical Anthropology of Colonial and Post-Colonial Cambodia*, Copenhagen: NIAS Press.
- Rooney, Dawn F. *Betel Chewing Tradition in South-East Asia*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1993.
- Sengers, Gerda. 2003. *Women and Demons: Cultic Healing in Islamic Egypt*, Leiden: Brill.
- Al-Sha‘rawi, Shaykh Muhammad M. 1994. *Magic and Envy in the Light of Qur’an and Sunna*, London: Dar al-Taqwa (Kindle 版).
- Sheikho, Muhammad Amin (trans. by Paul Baynes) 2014. *Unveiling the Secrets of Magic and Magicians*, Munich: BookRix (Kindle 版).
- So, Farina. 2011. *The Hijab of Cambodia: Memories of Cham Muslim Women after the Khmer Rouge*, Phnom Penh: Documentation Center of Cambodia.
- Taylor, Philip. 2007. *Cham Muslims of the Mekong Delta: Place and Mobility in the Cosmopolitan Periphery*, Copenhagen: NIAS Press.
- Thurgood, Graham. 1999. *From Ancient Cham to Modern Dialects: Two Thousand Years of Language Contact and Change*, Oceanic Linguistics Special Publication, no.28, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Trần, Kỳ Phương and M. Lockhart eds. 2011. *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*, Singapore: NUS Press.
- Trankell, Ing-Britt. 2003. “Songs of Our Spirits: Possession and Historical Imagination among the Cham in Cambodia,” *Asian Ethnicity* 4/1: 31-46.
- Vickery, Michael. 2000. *Cambodia 1975-1982*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Ysa, Osman (trans. by Rich Arant). 2002. *Oukoubah: Genocide Justice for the Cham Muslims under Democratic Kampuchea*, Phnom Penh: Documentation Center of Cambodia.
- . 2006. *The Cham Rebellion: Survivors’ Stories from the Villages*, Phnom Penh: Documentation Center of Cambodia.
- . 2010. *Navigating the Rift: Muslim-Buddhist Inter-marriage in Cambodia*, Phnom Penh: np.